

僕がはじめてグループデートをした日



泉
Izumi Asato
麻人



中公文庫

ぼく
僕がはじめてグループデートをした日
ひ

定価はカバーに表示してあります。

1997年10月 3 日印刷

1997年10月18日発行

著 者 いずみ あさと
泉 麻人

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Asato Izumi

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷
ISBN4-12-202960-0 C1195 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

僕がはじめてグループデートをした日

泉 麻 人



中央公論社

目次

僕がはじめて
グループデートをした日 7

僕がはじめて
ポルノ映画を観た日 23

僕がはじめて
ギターを弾いた日 41

僕がはじめて
マクドナルドのハンバーガーを食べた日 59

僕がはじめて
ハイライトを喫った日 77

僕がはじめて
オクラホマミキサーを踊った日 95

僕がはじめて
グアム島に行った日 113

僕がはじめて
TVに出た日

131

僕がはじめて
救急車に乗った日

147

僕がはじめて
暴走族に殴られた日

165

僕がはじめて
坊主になった日

183

僕がはじめて
乱パ―に行った日

201

あとがき——あるときボクも青かった……

218

文庫化記念対談
(初体験編)

原田宗典×泉 麻人

221

僕がはじめてグループデートをした日

本文カット 喜国雅彦

僕がはじめて グループデート をした日



これから毎月、僕がはじめて何かをした日のことを想い出しながら、書いていきたいと思う。ま、それでも大人になってからのこと、たとえば「はじめて会社に辞表を出した」とか「はじめて親の葬式を出した」「はじめて胃カメラを飲んだ」なんて話はあまり色気がないので、主に思春期の頃の話が中心になっていくであろう。

まずは中学生の頃の、はじめて色気づいたあたりの話から披露してみよう。

僕はこんどの春で三十八になる。中学に上がったのはおよそ二十五年前。時代で言うと一九六九年、東京オリンピックの五年後、万国博の一年前、グループサウンズとウルトラ怪獣のブームがちよっと下火になり、吉田拓郎や岡林信康らによる“ニューフォーク”ブームが盛りあがりはじめて、七〇年安保に向けての過激派学生の運動は頂点を極め通学の山手線が止まり、学校がよく休みになった——簡単に言えば、そんな時代である。

僕は小学五年生の時から進学教室に通い、三田にある慶応の付属中に入学した。慶応の付属中学はもう一つ、神奈川の日吉に普通部という男子校があるのだが、僕の入学した三田の中等部の方は女子生徒も三分の一の割合でいて、服装も基本的に自由で（ヒッピーみ

たいなカッコはまずいが）学園的ムードの校風であった。

よって色気づくのもけっこう早い。難解なつるかめ算や保元平治の乱の年号も「人形峠はウランの産地」といった知識もすぐに吹っ飛んで、皆、めくるめくバカになってゆく。

デート、というもんをはじめてしたもの、そんな中学一年生の夏の頃ではなかったか、と思う。デートと言っても、最初のそれは、3対3のグループデートというやつである。

新宿の落合の区立小学校上りの僕は、クラスのなかでも晩生^{おくて}の方であった。その中学は、女子は付属小（つまり慶応幼稚舎）から上がってくる者が大方なのだが、男子は数名を除いて、各小学校から受験をして入ってきている。

ただ受験組のなかでも、お坊っちゃん系私立小学校上がり（森村とか東横学園）とか、区立でも港区白金小上りの奴なんかは、やっぱりマせているのである。彼らと幼稚舎組の連中がいわゆるファッションや恋のオピニオン・リーダー的役割を果たし、徐々に新宿の落合あたりから来た素朴な少年もその空気に染まっていく、という仕組みになっていた。

僕は、そういうとつぱい少年だったわけである。風体は、小学三年生の頃からの肥満児の名残りがあり、髪型はボサツとした坊っちゃん刈りが崩れたようなスタイルで、そして通学のときにはオヤジから下がってきたダボツとした香港シャツに、母親が池袋三越の紳士服バーゲンなんかで買ってきたブカツとしたグレーのズボン、何の変哲もない黒のヒモ

革靴、といったコーディネートであった。

Sという最初に親友になった男は、家が同じ落合ということから自然と親交が深まっていた。しかしSは同じ落合の人間でも私立小学校上がりで、僕よりも遥かに先をイッていた。

知り合って一、二か月経った頃だったろうか、Sが僕の通学ファッションを見て、言った。

「おめえナング、そのシャツは。ダメだよシャツはボタンダウンじゃなきゃ、それと靴下はVANミニ、赤と黒の三本線が入ってるやつ、なっ！」

VANミニというのは、VANのジュニア版のブランドである。赤・黒・赤（だったと思う）の三本線のポイントが裾の所に入った白いコットン・ソックスで、当時のオシャレ中学生の定番となっていた。

そしてこれに、リーガルのビーフロール型のローファーをコーディネートする（甲の飾^{バシラ}りの所にペニーコインを入れるのはやりすぎだったが）。

僕はSに諭^{さと}されて、新宿の「ISEYA」に一連のVANアイテムを買い出しに行くことになる。ISEYAはいまも伊勢丹の斜向かいにある老舗のトラッド・ショップで、そこにはVAN、JUN、GANTといったブランドのシャツやセーターが豊富に揃っている。

た。

JUNと聞いて、ヨーロッパ系のイメージを浮かべる方も多いかと思うが、その当時はアイビー、トラッドのブームに乗って、VANと同じラインのBDシャツやVネックのシェトランドセーターも精力的に販売していたのだ。

そして僕は以降、母親が適当に買ってくるシャツやズボンを受けつけなくなる。洋服は小遣いを貯めて自分で買うもの——といったジャンルに属されるようになったのだ。

Sともう一人、Yという男と親交を深めるようになった。

Yもやはり、通学エリアが同じ中野の住人で、彼は兄貴がいる影響でファッションというよりも、人間的にマせていた。

確か、「この世にオナニーというものがある」ということなどを教えてくれたのも、Yではなかったかと思う。もともと、手とり足とりではないけれど。

服装は基本的に自由であったが、始業式とか講演会とかの行事があるときには制服（いわゆる詰襟の学生服。後にブレザーに変わった）を着る、という規則があった。

Yはそういうときに被る学帽に凝っていて、ペッタンコに潰した学帽を、ちよつと不良ぶった感じに、斜に被っていた。

ペッタンコに潰した学帽の表面の色が剥けていて、いかにも着古したというような趣き

を漂わせている。それが中学生くらいの少年の目には、実にカッコイイ。

どうすればそういう学帽になるのか？ と尋ねたら、

「百科辞典の下に入れて潰してから、フライパンに油ひいて炒めるんだよ」

さらりと言った。

僕はさすがにフライパンで学帽を炒めることにはトライしなかった。また、Yがフライパンで学帽を炒める姿を見学させてもらったこともない。

先にも触れたが、当時グループサウンズに代わって、フォーク・ブームが静かな盛りあがりを見せていた時代で、Yはいち早くアコースティックギターを手にしていた。

フォークソングにもいろいろあるが、その頃最もトレンドというか、力をもっていたのが「反体制フォーク」というジャンルに属するものである。岡林信康や高田渡のURCレベルのレコードを、新宿の紀伊國屋書店二階のレコード店で探すのがシブかったのだ。

ISEYAでVANのシャツを買った後に紀伊國屋の二階で岡林信康を探すわけだから、価値観がメチャメチャである。

Yはよく教室で岡林の「月わたしの好きなあミツルさんは」という、放送禁止になった曲（「手紙」）を口ずさんでいた。

Yはその後ギターにハマりすぎて成績が落ちた、という理由で、オヤジさんにギターを

叩き壊される。Yのオヤジさんには会ったことがないのだが、とにかく、ギターを叩き壊すコワイオヤジという印象だけがいまも頭の隅に残っている。

さて、いよいよ本題に入るわけだが、そんな早熟なYが、僕とSにグループデートの相談をもちかけてきたのは、中学一年の夏休みの直前であった。

と、断定的に書いたが、その件については日記等の記録がないので、本当の所は多少時期がズレているかも知れない。ただYとSと同じクラスで、親交が密だったのは中一のことであるから、まあここではその年の夏ということにしておこう。

ターゲットは、T子、M子、I子という同じクラスの女子（姓名までハッキリ記憶しているが、ここでは姓のアルファベットに子を付けた）。

T子は確か、どこかの進学校から受験して入ってきた秀才女子（女子の競争率は当時、二十倍くらいだったと思う）で、M子とI子は下（付属小）から持ち上がってきた組だ。下から組の女子は全般的に派手なのだが、M子とI子はそのなかでは地味な方で、そういうタイプの者は、わりあいと外からの人間とくつつく傾向にある——ということが、後からわかった。

下から組のなかでは地味とは言え、その頃の僕から見れば、彼女たちは「昔から港区あたりをウロウロしている洗練された都会のオンナ」というやつで、近づくことも畏れ多か

った。まだ地下鉄などを乗り継いで銀座へ六本木へ、という行動に慣れていない頃だったので、港区や渋谷区あたりの学校に昔から通っていた女子、というのは、近所の小学校時代の女子とは別モノであった。遠い存在、であった。

YとT子、SとM子、僕とI子。

という組み合わせが、いつの間にやら決まっていた。

僕の記憶ではそのプランが固まる少し前から、YとSが盛んに「おまえ、クラスで誰が好きなんだよ、I子とかいいんじゃないか、なんか意識してる感じだぜ」というようなことをけしかけてきた。そういう印象がぼんやりと残っている。

僕はそれまで、さほどI子のことを想っていなかったのだが、何かそのグループデートに向けて徐々に洗脳されていた、マインドコントロールされていた、僕もじきに「オレはI子のことがかけっこう気に入っている」というような暗示をかけ、努力していたような気がする。

最も力が入っていたのは、もちろんYであった。そしてSも、まあまあM子に好意を抱いていた。

YとSとの「談合」でその話は成立し、相手が仲良し三人組ということで、オマケとして僕が加えられた——という状況が後に明らかになってくるわけである。

喫茶店(居酒屋)の席順にみる
年齢別 グループデートの図

